月刊

こころのとも

第十二巻
三月号

法が廃れる

以前から
法曹界が
無茶苦茶と
思っていたけど
それを露呈す

法で食う
法の番人
法を無視
法を汚して
法が廃れる

トップランナーでなくても

トップランナーで
なくてもよいではないか
二番目でも三番目でも
みんな仲良く
暮らすことの方が
ずっと大切ではないのか

人生を考え直して みたい人は（八六）

―『正法眼蔵』解説（三〇）―

有時の巻を続けます。

葉県（せっけん）の帰省（きせい）禅師は、臨済の法孫なり、首山（しゅざん）の嫡嗣（てきし）なり。あるとき、大衆（だいしゅ）にしめしていはく、有時意到句不到、有時句到意不到。有時意句両俱到、有時意句俱不到〔有時は意到りて句到らず、有時は句到りて意到らず。有時は意句両（ふた）つ俱（とも）に到り、有時は意句俱に到らず〕。

意句ともに有時なり、到不到ともに有時なり。到時未了なりといへども不到時来なり。意は驢（ろ）なり、句は馬（ば）なり。馬を句とし、驢を意とせり。到それ来にあらず、不到これ未来にならず。有時かくのごとくなり。

到は到に○礙（けいげ）さられて不到に○礙さられず、不到は不到に　礙せられて到に　礙せられず。意は意をさへ、意をみる。句は句をさへ、句をみる。礙は礙をさへ、礙をみる。礙は礙を礙するなり、これ時なり。礙は他法に使得（しとく）せらるといへども、他法を礙する礙、いまだあらざるなり。我逢人（がふにん）なり、人逢人なり。我逢我なり、出逢出なり。これらもし時をえざるには、恁麼ならざるなり。

〔○＝（けい）は「罫」のトがない字です〕

例によって、参考までに玉城康四郎著『現代語訳正法眼蔵1』（大蔵出版刊）の現代語訳を、最初の段落のみ、引用させて頂きます。

葉県の帰省禅師は、臨済義玄の法孫であり、首山省念の法を嗣（つ）いでいる。あるとき僧衆に示していうに、

「あるときは、思いは届いても言葉が届かない。あるときは、言葉は届いても思いが届かない。あるときは、思いも言葉も届いている。あるときは、思いも言葉も届かない」と。

以下は、いつものことなのですが、玉城康四郎著の訳が余りにも直訳過ぎて、よく分かりませんので、少し意訳になっている訳（で、こんなのもある）例として、谷口清超著『正法眼蔵を読む（中巻）』（日本教文社刊）のものを引用させて頂きます。

意とは即ち心であり、句とは言葉である。この意も句も、倶（とも）に「有時」である。到不到も倶に「有時」である。到る時が未だ来ていなくても、不到の時はすでに来ている。それは「有時」だからだ。意は驢のようなものであり、句は馬のようなもの。即ち馬を句とし、驢を意としている。これらはすべて“乗物”であるから、その主人公は到の時来たのではなく、不到の時来ていないのでもない。もうすでに「有時」においてはあるのだ。それが「有時」である。

到というと到に引っかかり、不到には引っかからない。不到の時は不到に引っかかって、到に引っかからぬ。意（こころ）が意を礙げ、意を色々に批判する。句（ことば）が句を礙げ、句を解釈する。こうして凡（あら）ゆる引っかかりがからみ合い、批判が交錯し合う。しかしこれは現象の時に関してのことだ。この引っかかり（礙）は一方真理によって自由自在に使われ悟りに導かれるとはいうものの、礙（げ）が真理を礙（さまた）げるということはない。たとえば「われ人に会う」という時、人が人に会い、また我が我に会うのである。それは又出（実相の現れ）が出に会うのである。これらがもし「有時」によるものでなかったならば、このようなことはあり得ないのである。

この部分も、かなり難解のようで、解説書によって解釈が異なります。もっと言いますと、「解釈」していると言えそうなものがありません。字句の置き換えや、その言葉が出てきた出典のようなものの解説はあるのですが、納得できるほどの「解釈」はありませんでした。

例えば、現代語訳として引用させて頂きましたお二人の訳でも、「到る」とは何を意味しているのか、まったく分かりません。玉城康四郎著の訳では、「届く」と訳していますが、何が「どこへ」届くのかが不明です。また、谷口清超著の訳では、「到る」はそのまま「到る」になっています。

私は、この「到る」は、ことばやこころが「他者（相手）」に到る、あるいは届く、と理解したいと思います。

こう思って、出だしの帰省禅師のことばを読みますと、前回および前々回の「拈華微笑（ねんげみしょう）」の話につながります。もう一度この二回分を復習して頂ければ幸いです。

今回、解説します部分を三つの段落に分けますと、最初の部分（帰省禅師のことば）は、前回、前々回の分をお読み頂ければ、解説は不要のように思えます。

次の、「意句ともに有時なり・・・有時かくのごとくなり」までの第二段も、次のことを念頭において読んで頂ければ、たいして難しくないのではないかと思います。

「有時とは何か」を昨年の一月号（第十一巻）で解説しましたが、それは「人間精神の存在そのもの」でした。そう考えますと、意句も到不到も有時と言えますし、また、人間精神は、常に過去と未来を今（現在）に統合しているわけですから、「・・・有時かくのごとくなり」となります。また、意や句を驢や馬にたとえるのは、これまでの前二回のたとえを見れば、たいした飛躍はないように思えます。

残りの第三段ですが、なかなか難しいように思えます。

まず「到は到に○礙（けいげ）さられて不到に○礙さられず、不到は不到に　礙せられて到に　礙せられず」ですが、ここの「到」「不到」は、言葉やこころによってコミュニケーションが「可能」か「不可能」かを示すものでしたから、ここで言わんとすることは、可能と不可能はハッキリと区別されるということだと思います。

次に「意は意をさへ、意をみる。句は句をさへ、句をみる。礙は礙をさへ、礙をみる。礙は礙を礙するなり」ですが、これもそれぞれが、区別があることを言っていると思います。「～をさえ」という言い方は、分かりにくいのですが、「意は意をさへ、意をみる」ですと、こころは、こころを媒介として（通じて、に徹して）こころを理解するという意味だと思います。

次に「礙は他法に使得（しとく）せらるといへども、他法を礙する礙、いまだあらざるなり」ですが、この礙は、どこまでも受け身であって、積極的に何かをさまたげることはない、といっていると思います。こころやことばが通じないのは、通じなくする精神の働きが、積極的にあるのではなく、ことばやこころの働きに備わった働きであると、言っているのです。

次に「我逢人（がふにん）なり、人逢人なり。我逢我なり、出逢出なり。これらもし時をえざるには、恁麼ならざるなり」ですが、私が人に会うのは、人が人に会うことである、それは自分が自分に会うことであり、出ていくことが出ていくことに会う、ということである、もし人間精神が時間的特性をもたないのであれば、こうは言えない、ということです。

時間は自己と他己の統合です。人に会うことは、その直接的な現れなのです。人が人に会うことは、お互いにこころを開いて外に出ていくという、相互的な行為なのです。自己と他己の統合なのです。それが、時間ということだと言っているのです。

自作詩短歌等選

安らぎと癒し

いまはやる
ことばの中に
「安らぎ」が
「癒し」と共に
頻出す
自己の肥大を
示すことばぞ

養生訓

ストレスを
ためず運動
怠るな
粗食に耐えて
笑いたやすな

凡愚が滅ぼす

誤りて
虚妄の世界を
真実と
受け取る凡愚
地球滅ぼす

根無国民

日本人
アイデンティティを
失って
世界唯一の
根無国民

共通なこころのあり方

いま
グローバルに
求められているのは
経済ではなくて
人のこころの
あり方

全ての恨みごとは
水に流そう
兵器はすべて
捨てよう
どんな理由でも
人に暴力を
ふるうまい
略奪・収奪を
やめよう
うそは決して
つくまい

他己を育てる教育

自己の生きる力
個性の伸張
といった
自己の肥大化を
もたらす教育では
カウンセリングは
ますます
自己肥大を
もたらすだけ

人を生かす力
自我の没却
といった
他己の芽を
摘み取らないような
教育をしなければ

人を助ける義務

文化的に生活する
権利を有する

権利はあっても
保障はされない

貧富の差は拡大し
セーフティネットも
役に立たない

それは
人を助ける義務を
言わないから

あらゆる人は誰でも
人を助ける義務を
背負っているのだぞ

教養教育の再評価

いま
大学では
教養教育が大切だ
という

思想・宗教を否定して
何が
教養教育か

わが子を殺す母

母親も
人間性を
失って
わが子でさえも
殺してしまう

小手先農業政策

農業を
小手先だけの
政策で
救済できると
思うな政府

天罰あたるは必定

物質の尊厳をおかし
生命の尊厳をおかし
精神の尊厳をおかして
「自己」主張をし続ける
あわれな人間たちよ
天罰はそこまで
来ているぞ

ケアーのいる学校

学校に
こころ無くなり
いま教師
ケアーをしたり
ケアーをされたり

弱みを暴く小説家

文学を
隠れ蓑にし
小説に
人の弱みを
あばいては
金を儲ける
作家たち
出版差止め
当たり前ぞよ

自作随筆選

行動予測の困難さ

読売新聞の神奈川県版三月六日付け夕刊に、また、徳島県版では三月八日付け朝刊に、紙上シンポジウム・新千年紀と題して小和田恒氏と中西輝政氏とグレン・フクシマ氏の対談が載りました。また、その記事の一部に、「基調報告」と題して、グレン・フクシマ氏の寄稿が載っています。その中に、次のような記述がありました。

五年以上の中長期の展望では、日本が世界で最も競争力のある国の一つとして復活すると私は楽観している。しかし短期的には、日本の組織がより柔軟かつスピーディーで、決断力に富み、グローバルで多様性を持ちリスクや不確実性、予見不可能な問題に対処できるようになるまでに、痛みを伴う移行期を経験するであろうと考える。資本主義の自由競争は勝者と敗者が存在するという考えを、今まで以上に受け入れて行くことが必要であろう。

果して「日本が世界で最も競争力のある国の一つとして復活する」かどうかはさておき、次にあります「日本の組織がより柔軟かつスピーディーで、決断力に富み、グローバルで多様性を持ち、リスクや不確実性、予見不可能な問題に対処できるようになる」と考えている点に、私は、まず、大きな疑問を感じました。

この中に「予見不可能な問題」という言葉がありますが、実は、現在、世界中のあらゆる事柄、自然災害や疫病の流行、偶発的事故は言うに及ばず、政治や経済、文化など、人間行動のあらゆる面で、どんどんと「予見不可能」になって来ているのです。政治的に、経済的に、あるいは、テロ行為なども含めて、何が起こるかが予測できない状態になっているのです。予測という事で言えば、今後、ますます予測できなくなって行くということだけが、予測できるということです。それは、世界中が不安定になって来ていて、社会を政治的に統治（ガヴァナンス）することが困難になって来ているということでもあります。そういう状況では、人間の相対的な判断力や決断力で、これに「対処」して乗り切るなどといったことは、ほとんど不可能になって来るのです。

何故、こうなったのでしょうか。

そこには、必然的な理由があります。

それは、民主主義に本質的に含まれている矛盾・欠陥が、時代の進行とともに、よりあらわになって来たから

なのです。

民主主義は、本質的に「自己」を追求する制度なのです。そこに人間存在の絶対的条件である「他己」の原理は含まれていません。この原理を失うとき人間は、物か動物に堕落する以外にない、という意味で人間の人間たるゆえんをなす絶対的条件なのです。

ところが、民主主義（かつての共産主義や社会主義を含む）では、この他己の原理がなくなり、自己ばかりを追求しているのです。それでも、これまでの欧米では、キリスト教が、他己の原理として働いて来ましたが、いまや、それがほとんど期待できなくなっているのです。

たとえば、現在、アメリカが世界に突きつけている、「自由競争」「市場原理至上主義」「グローバリゼーション」の要求では、この他己の原理はまったく無視されています。その幾つかの現れをあげて検討してみたいと思います。

まず、地球温暖化防止のための国際的な取決めについてみてみたいと思います。そのための会議が何年か前、京都で開かれたことがありました。日本やアメリカなどは、温暖化の元凶である二酸化炭素ガス排出量の規制に消極的でした。自分たちが、世界で一番多く排出しているのに、それを発展途上国なみに、引下げもしないで、発展途上国にはこれ以上の排出を差し止めようとしましたが、これなどは、大国のエゴによる弱者の無視以外の何ものでもありません。「他己」を働かせて、発展途上国のことを考えるのなら、まず、アメリカや日本が、発展途上国なみに、化石燃料の使用量を抑えるのが、ものの道理というものです。

次に、「ダイエー」や「そごう」に象徴されますように、これまで発展して来たスーパーや百貨店は、多くがその経営に行き詰まっています。そして、現在、小売業で儲かってどんどん発展していますのは、「ユニクロ」や「ダイソー」に象徴されます、破格的な安売りの店なのです。そうした商売を可能にしていますのは、中国をはじめ、アジア諸国からの安い製品の輸入です。先日、タオル業界が成り立たないと、緊急輸入制限を申請しました。また、椎茸やピーマンなどの農産品も、安いアジアからの輸入品に対抗できなくなっています。

自由競争・市場主義などの原理が支配する世界では、安い品物に競争力があり、高い品物を凌駕し、駆逐していくのは、国際的にも当然なのでしょうが、しかし、よく考えてみますと、私たちは、アジア人の安い賃金（日本人の何十分の一かの賃金）で働いてもらっているお陰で、安い品物を買わせてもらっているのです。それは、

マルクスでいいますと、搾取です。もっと現代風に言いますと、他国からの価値の収奪だと言えます。

二酸化炭素ガスの排出量を増やさないで（つまり、産業発展の基礎となる電力消費量や自動車台数などを増やさないで）、少しでも豊かになろうとすれば、安い賃金の労働集約的な生産品にたよる以外にはありません。目先的には、先進国は、実は、こうした状態を続けていくことが、きわめて好都合なのです。

自由な競争では、強者が勝ちます。強者とは、現在では、自由競争・市場主義を建前として、自己だけを追求し、科学的知識や技術・技能を多く蓄積している国や人間たちなのです。それは、いわゆる先進国や、そこに住む人たちと言えます。

しかし、そうした制度の下では、貧富の差が開いていくのは、国際的な国家間だけではありません。国内でも、貧富の差は開いています。アメリカでは、路上生活者が増えていますし、また、上層階級の少数の人たちが、国家全体の所得の多くの部分を占めています。日本でも、アメリカと同様に、所得税の累進率を低くしたり、相続税率を引き下げて、貧富の差を拡大する政策を取ろうとしています。そうした政策を支える理論は、結果の平等ではなく、機会の平等を重視することで、社会が活性化するという考えにあるようですが、それは、まったくの詭弁です。人間には機会の平等などあり得ません。

自由競争・市場原理至上主義・グローバリゼーションでは、強者が勝ちますが、それは、必然的に貧富の差を生み出すのです。それは、いわば他者収奪的だということです。他者とは自分以外のあらゆる存在です。物質・生命（動植物）・精神（人間）の全ての存在のことです。そうした存在を自分の利益と選好〔快適性・利便性・享楽性（エンジョイ）〕のために開発し、利用するのです。

それをまさに享受できる人たちが説く原理が、前述の三つの原理に他ならないのです。

民主主義が自己追求の原理のみで、宗教や信仰に支えられて来た他己原理が衰退した現在、その制度が多くの矛盾を産みだしていることをみてきました。

ここで、そもそも他己原理とは何なのか、検討しておきたいと思います。

それは、人間が、動物から、単なる動物の原理を脱して人間に進化した時に獲得した、あるいは宗教的に言えば、神や仏さまから授与された原理なのです。

その最も分かりやすい現れは、動物では仲間の死に対して「こころ」を傷めて、その死を弔うことは、決してありません。人間だけが、他者（ひと）の悲しみを我が

悲しみとすることができるのです。あるいは、人の喜びを我が喜びとすることができるのです。それを一般的な言葉でいいますと、人間だけが、「人の心を感じるこころ」をもつことになったのです。

そうした、他者と情動を共有する「こころ」は、仲間同士の間の慣習や伝統を生み出します。それは、難しくいいますと、倫理・道徳であり、規範ということになります。

その他者との情動の共有を突き詰めていきますと、絶対に安定した他者である「絶対他者（神仏）」と、一体感を体験することへと向かいます。それが、信仰であり、宗教です。その一体感を体験することは、理屈ではありません。まさに「こころ」の問題なのです。もっと言いますと、無意識の問題なのです。実は、「こころ」で他者との情動の共有をしようと思っても、「こころ」には、自己へ執らわれた部分もあります。それは、自分の欲望や情緒や気分への執らわれです。人間は、そうしたものによって「人の心を感じるこころ」を麻痺させるのです。

実は、そうならないためには、人間は、こころを磨いて（＝修行して）不動なこころに到らなければならないのです。

また、そうなるためには、「意識」でいくらそうなろうと思ってもだめなのです。時間をかけて毎日まいにち、こころを磨いて「無意識」のうちにそうできるようにならなければなりません。あるいは、そうなった人を信じ、その教えに則って、ひたすら修行する時だけ、そうなれるのです。

こうした他己の原理の根幹を磨いたとき、その上部構造である、「人の心を感じるこころ」、つまり中国思想の根幹をなしてきた「仁」も、私の理論でいう、自我一人格機能の、倫理や道徳も、規範性も、伝統や慣習の尊重もみな身につけることができるようになれるのです。

いま、こうした他己の原理が弱くなり、みな自己を肥大化しています。それを支える思想が、人権をはじめとした権利の主張を中心にすえた民主主義なのです。あるいは、いまアメリカが唱える自由競争・市場原理至上主義・グローバリゼーションなのです。それは他己を喪失させます。

他己を失うことは、人間性を失うことです。動物に回帰することです。あるいは物に戻ることです。

そうなったとき人は、自分の欲望や情緒や気分、つまり、自分の利益と選好（快適性・利便性・享楽性）にのみ基づいて行動するのです。それが合理的行動と呼ばれるのです。他己があるとすれば、せいぜい「礼」のみで

す。心理学の言葉で言えば、ソーシャル・スキルのみになります。日本古来の言葉で言えば、慇懃無礼になっていくということです。いまの国会の議論のように、言葉や態度に真実がなくなってしまうのです。ただ、言葉や態度をつくろっているだけです。

人間がこうなったとき、その人の行動はきわめて予測が困難になります。人の行動が予測できるのは、そこに倫理・道徳や規範性があるからです。それらは、行動の規則性でもあります。つまり、前例、伝統、慣習、約束、法規などに従うということでもあるのです。

そうした倫理・道徳や規範性が喪失するということ、つまり権利という美名のもとに、自分の利益と選好のみに基づいて行動したり、自分の「こころ」に執らわれて、自分の怨恨や憎悪、あるいは意地によって行動するということは、他人の「こころ」を無視して、人から平気で収奪することもできますし、ましてや物質や生命も平気で浪費することができるということなのです。そして、最終的にはその存在を否定するということに至ります。

こうした現実は、いまや、世界の各地に見られます。その主なものは、民族や宗教間の対立であり、争いです。こうした行動はとても、予測が困難です。和平が実現したかに見えても、すぐ破れます。

現在、アメリカの繁栄にかげりが出始めています。グリーンスパン氏の金融操作による景気の調整も、いまや不能になりつつあるように思えます。私は、彼の取る政策に深い関心を寄せています。アメリカも統治不能に陥りつつあるのではないでしょうか。私の杞憂に終われればよいのですが。

また、一昨年の暮れ（一九九九年十一月）に、世界貿易機構（ＷＴＯ）が、米国シアトルで第三回閣僚会議を開きましたが、予想だにしなかった決裂に終わりました。その主な原因は、発展途上国の抵抗にあったのですが、それを支援する多数の人たちの抗議デモもありました。それに参加した人たちは、市民、ＮＧＯ、農業団体などの人たちです。

ＷＴＯは、ご存じのように、何度もあげました三つの原理を掲げて、世界的に自由貿易を推進しようとする機構です。しかし、それは、既に述べましたように、多くの矛盾を生み出しています。それが、会議を予想外の決裂に終わらせる遠因になったと思われます。

このように、いま、世界中の人が自己肥大・他己萎縮に陥り、行動が予測できなくなっています。それは、世界が極めて不安定になって来ているということです。対症療法では、もはや対処できる程度を超えているのです。

後記

一、いつまでも寒い日が続いています。でも、確実に春になっているようで、先日、つくしがたくさん出ていて、採取してきて食べました。昨年も書きましたが、はかまを取るのがたいへんですので、はかまのもとのところをはさみで切って、取りました。細切れになりますが、手でむいて取るよりはるかに能率的です。

二、道元は難しいでしょうか。なにしろ禅宗では、いろいろな語録が出ていて、そのことばを出典に触れないで引用しながら、自分の論を展開していますし、また、その中には公案になっているものもあったりして、どうしても難しくなります。また、禅宗では、わざと分かりにくく言って、それを理解することが、内的な悟りの高さを測る指標になっていますので、道元もわざと分かりにくく言っている面があると思います。また、たいした意味もないのに、修辞法的に凝った表現を好んで使用していますので、ますます、分からなくなるのだと思います。私の解説をよく読んで頂ければ、かなりの部分は、ご理解いただけるのではないでしょうか。

三、今月号は、随筆が長くなり、「釈尊のことば」が載せられませんでした。申し訳ありません。

四、その随筆ですが、ごたごたと書きましたので、読みづらかったかもしれません。

五、最近、経済の本や社会学者の書いた本を読んだりしていますが、とても今後の役に立つとは、私には、とても思えません。読めば読むほど、この方面でも、発言しておかなければと思えてきます。今回の随筆も、日頃思っていることの一端を、「予測の困難さ」に即して書いてみました。

六、あの随筆を書いてからも、アメリカの株価はどんどんと下がっているようです。日本でもそれにつれて下がっています。でも日本の方がずっと深刻だと思いますが。世界的混乱に発展しないよう、祈らずにはおれません。

月刊　こころのとも　第十二巻　三月号（通巻一三五号）

平成十三年三月八日
〒772―8502
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号０１６１０―８―３８６６０